

松嶋夜話 卷之下 8

〔原文〕慈受禪師訓童行有二十偈

〔訓読〕慈受禪師の訓童行に二十偈有り

〔原文〕摘其一二関曰

〔訓読〕其の一二の関を摘む、曰く

〔原文〕焼香禮拜莫匆匆

〔訓読〕焼香、禮拜匆匆なること莫れ

〔原文〕目覩心存對聖容

〔訓読〕目に覩て心に存し、聖容に對す

〔原文〕懺悔多生塵垢罪

〔訓読〕多く塵垢を生ず罪を懺悔す

〔原文〕願乘法水洗心胸

〔訓読〕願ひて法水を乘(う)けて心胸を洗ふ

〔原文〕又一等出家爲弟子

〔訓読〕又一等出家して弟子と爲る

※一等…これ、よくわかりません

〔原文〕事師如事在堂親

〔訓読〕師に事うことが在堂の親に事うるが如くせよ

〔原文〕添香換水須勤謹

〔訓読〕香を添えて水を換えて須らく勤謹すべし

〔原文〕自有龍天鑑照人

〔訓読〕自ら龍天の人を鑑照する有り

〔原文〕又廊下逢僧須問訊

〔訓読〕又廊下に僧と逢えば、須らく問訊すべし

〔原文〕門前遇客要相呼

〔訓読〕門前に客に逢えば、相い呼ぶを要めん

〔原文〕出家體態宜謙讓

〔訓読〕出家して體態宜く謙讓となるべし

〔原文〕莫學愚人禮數無

〔訓読〕愚人の禮數しば無きを學ぶ莫れ

〔原文〕又莫說他人短與長

〔訓読〕又、他人の短と長を説く莫れ

〔原文〕説來說去自招殃

〔訓読〕説き來たり説き去りて自ら殃を招く

〔原文〕若能閉口深藏舌

〔訓読〕若し能く口を閉じ、深く舌を藏せば、

〔原文〕便是安身第一方

〔訓読〕便是れ安身の第一方

〔原文〕又色身健康莫貪服

〔訓読〕又た色身の健康、貪服すること莫れ

〔原文〕作務辛勤要向前

〔訓読〕作務辛勤、向きに前むことを要す

〔原文〕不見碓坊盧行者

〔訓読〕碓坊の盧行者を見ず

※盧行者：佛禪宗第六祀慧能禪師の稱。姓は盧氏。初め五祇弘忍の下で道を修め、盧行者又は盧居士と稱す。行者は有髮の修行者の稱。

〔原文〕祖師衣鉢是渠傳

〔訓読〕祖師の衣鉢是れ渠ぞ傳ふ

〔原文〕又諸寮供過要精勤

〔訓読〕又た諸寮の供過、精勤を要む

※供過：仏語。食物などを送ること。

〔原文〕掃地煎茶莫厭頻

〔訓読〕地を掃き、茶を煎じること、頻を厭う莫れ

〔原文〕事衆若能常謹切

〔訓読〕衆に事へて、若し能く常に謹切ならば

〔原文〕身心方是出家人

〔訓読〕身心方に是れ出家の人

〔原文〕又終南山主峯宗密禪師偈曰

〔訓読〕又た終南山の主峯宗密禪師の偈に曰く

※圭峰宗密：中国の唐代の禅僧。中国華嚴宗の第五祖とされる。諡は定慧禅師。俗姓は何、名は炯。果州西充県の出身。長慶元年（821年）以後、終南山の草堂寺に住して、『円覚經大疏鈔』等の撰述に没入した。

〔原文〕作有義事是惺悟心

〔訓読〕有義の事を作すは、是れ惺悟の心

〔原文〕作無義事是狂亂心

〔訓読〕無義の事を作すは、是れ狂亂の心

〔原文〕狂亂隋情念臨終被業牽

〔訓読〕狂亂は情念に随ひて、臨終に業に牽かる

〔原文〕惺悟不繇情臨終能轉業

〔訓読〕惺悟は情に繇（よ）らず、臨終に能く業に轉ず

〔原文〕又周京師大中興寺道安師遺誡九章以訓門人

〔訓読〕又、周の京師の大中興寺の道安師の遺誡九章、以て門人に訓す

〔原文〕其八章曰卿已出家性有昏明學無多少

〔訓読〕其の八章に曰く、卿已に出家し、性に昏明有り、學に多少有り

〔原文〕要在修精上士坐禪中士誦經下士堪能

〔訓読〕要は修精に在り、上士は坐禪、中士は誦經、下士は堪能

〔原文〕塔寺經營

〔訓読〕塔寺經營せよ

〔原文〕豈可終日一無所成

〔訓読〕豈に終日一も成る所無くべからんや

〔原文〕立身無聞可謂徒生

〔訓読〕身を立て聞くこと無くば、徒だ生きると謂うべし

〔原文〕今故誨汝

〔訓読〕今故（ことさ）らに汝に誨（おし）ゆ

〔原文〕宜自端情

〔訓読〕宜しく自ら情を端す

〔原文〕又白楊順禪師示衆曰

〔訓読〕又た白楊の順禪師の示衆に曰く

※白楊…地名？

※白楊法順禪師（1076～1139年）

〔原文〕染縁易就道業難成

〔訓読〕染縁は就き易く、道業成り難し

〔原文〕不了目前萬縁差別

〔訓読〕目前を了せず、萬縁を差別す

〔原文〕心火炎炎燒盡菩提之種

〔訓読〕心火炎炎として菩提の種を燒盡す

〔原文〕道念若同情念

〔訓読〕道念若し情念と同じならば

〔原文〕成佛多時爲衆一似爲己

〔訓読〕成佛多し時、衆の爲にすること一に、己の爲にするに似たらば

〔原文〕彼此事辨

〔訓読〕彼此の事辨ず

〔原文〕不見彼非我是

〔訓読〕彼の非、我が是を見ず

〔原文〕自然上敬下恭

〔訓読〕自然に上敬い、下恭しくす

〔原文〕佛法時時現前

〔訓読〕佛法時時現前し

〔原文〕煩惱塵塵解脱

〔訓読〕煩惱塵盡に解脱せん

〔原文〕如上示偈小少時先師閑之於余

〔訓読〕上の如き示偈、小少の時、先師之を余に閑（なら）はしむ

〔原文〕偶念記追憶之

〔訓読〕偶たま念記し、之を追憶す

〔原文〕書喻左右者

〔訓読〕書きて左右の者を喻す

〔原文〕斯寔有義事乎也

〔訓読〕斯れ寔に有義の事なり

〔原文〕日用宜鑑察

〔訓読〕日用宜しく鑑察すべし